
純情詩編

雲崎朝成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純情詩編

【Nコード】

N7786A

【作者名】

雲崎朝成

【あらすじ】

誰の心の中にもある物語。その多くは語られることなく胸の中に秘められている。大切なものを失った喪失感に自分を見失った大人。その様子を見て親に対して疑心暗鬼になる息子。自分の中にある物語に気づいたとき、人生は動き出す。

春風（1）

かけがえのない、大切なものを失ったとき、人はどうするのだろうか、どうすべきなのだろう。

陳腐な表現を用いるならば、失ったものの価値は失ったときに初めて分かる、という。その価値に気づいたとき、人は初めて、自分が絶望の淵に立たされ、もはや後戻りできない恐怖に気づくのだ。悲しみと後悔の大きさをゆえに。

妻の死を聞いたとき、私は、泣くことも、悲しむことも、苦しむこともなかった。

私の中にあつたのは、空虚だけだった。まっさらな空虚、純然たる空虚、生まれたての空虚が。

それは一時的に私を支配しているだけのことで、いつかは、悲しみと絶望とが私を埋め尽くすのだろう、と思っていた。

しかし、いくつかの段取りを経て妻が灰になっても、空虚は私の中に居座り続けた。妻の死は、たくさんの人達に悲しみを与えた。少なくとも私にはそう見えた。

だけど、私には与えられなかった。空虚のみしか持たない私はいつの間にか、主役の座から引き下ろされ、脇に据えられた。名前も知らない誰かが、我が物顔で主役になっていた。悲しみこそが絶対で、他の要素は考慮されない舞台だった。

結局、私は、一度も主役にはなれなかった。空虚が私を支配してい

たために。

通夜の際、泣き続けている女性がいた。歳は妻と同じぐらいに見えるので、おそらく、妻の友人だったのだろうと思ひ、彼女が落ち着いてから、話しかけてみた。

私は、悲しみを欲していた。

彼女はおそらく、この場でなければ、美人と呼ばれる人間であるだろう。

ただ今は見るも無残に化粧は崩れており、顔は真っ赤になっていて、ぱっちりとした目は、今では、涙を流すために有効であるとばかりしか思われなかった。

私は深い考えもなく、悲しみを得る上で有用な人物の一人として彼女に声をかけたのだが、彼女は主演女優にでも抜擢されたと勘違いしたのか、今まで以上の悲しみに包まれた。私と言えば、相手の予想外ともいえる反応にただただ驚くばかりで、形ばかりの言葉を用いて、彼女を落ち着かせるので精一杯だった。

彼女は自分一人ですっかり満足してしまうと、

「ご主人の方こそ辛いのにね」と言った。

私は、悲しみを得るばかりか、より深い空虚を溜め込む羽目になった。

通夜が終わると、妻を弔う段取りは滞りなく進んでいき、私は一人、ずっと同じ場所においてけぼりをくっていた。

当初の、私の、空虚を何かで埋めようとする情熱はもう消え失せてしまつて、私は傍観者に成り下がっていた。

そして、一度か二度しか会つたことのない、妻の親戚達はすっかり主役級の地位を確たるものにしていた。

私はもはや舞台に立っていないのに、主役になるべき人物は役割を放棄してしまつたのに、物語は進んでいった。

どうやら場面は変わつて、

「妻の死を乗り越える」
シーンになつたらしい。

そろそろ物語も終わりに差し掛かっている。物語が終われば何も残らない。当然、脇役に追いやられ、いつの間にか舞台から姿を消していた者のことなど、完全に忘れ去られてしまふだろう。

ここで、今回、見事な立ち回りを見せ、周囲の期待に見事答えた人物を紹介せねばなるまい。

私の息子・紘一である。彼は当初より、目の肥えた人々を十分に満足させた。使えない父親に代わり、獅子奮迅の活躍をしたわけだ。

そんな彼も、終盤に、この段になつて大きなポ力をやらかした。すでに

「妻の死（彼にとっては母の死である。この辺りの相違が彼のミスを誘発したのかもしれない）を乗り越える」

シーンであるのに、彼は未だに

「妻の死（母の死）を悲しむ」

シーンを引きずってしまったているのだ。

いや、これはミスではなく、彼流のアドリブだったのかもしれない。ある意味では、周囲を納得させ、満足させていたからだ。

とは言っても、少なくとも私には、この場面に合わないように思われた。

「男の子なんだから、しっかりしないとイケない」

というのがこの場面で主流であって、この場面では最もふさわしいように思われた。

まあ、小学生にも上がったばかりの少年にそこまでのことを要求するのは酷なことだろう。そのことは彼の評価を著しく下げるものではないし、罰を受ける理由にはならない。

罰を受けるべきは、私だ。

その私は、舞台からも降ろされ、舞台を眺めていることしかできなくなつて、すでに幕引きを望んでいた。

この、悲しみで彩られた物語は、ただ見ているにしては少々長すぎるし、苦痛である。

私は、一刻でも早く終わることを望んでいた。一分でも一秒でも早く。

今、私が置かれている状況は、私に対して苦痛しか 妻の死そのものからではなく、自分の行動や感情から生じたものからの 与えていなかった。

結局、私は何もすることなく、この苦しみが去るのを待っていただけだった。

それでも物語は落ち着くところに落ち着き、登場人物達は普段の生活へと戻っていった。

「妻の死を巡る物語」

は主役に相当すると思われる人物には重要な役割を与えず、端役に見せ場を作った。こんな話、誰が望むのだろうか。悪い意味で読者を裏切ったのだ。

だから、この物語はおそろしく二流だと思った。
だから 絶対に誰にも話さないよう、決心した。

春風(2)

妻が死んでから、何か生活が変わると思っていたけれど、世の中は、変わらずに進んでいた。今日は昨日の次の日だったし、明日は今日の次の日であるに過ぎなかった。

「コウ君、起きな！。学校、遅刻するよー」

早く起きる日は私の方が多いのだが、絃一が早く起きる日もある。今日も私が早く起きた日だ。絃一が早く起きるのは、何か悲しい夢を見た日だ。いつか絃一が話してくれたことがある。夢の内容は決して話してくれなかったが、内容はなんとなく察せられた。

絃一はむっくりと起きあがったが、まだ半分夢の中にいるらしく、気の抜けた顔でぼんやりしている。

「うう、うーん。おはよう。今、なんじ？」

「7時…10分ぐらいかな」

「えっ、ほんとに！たいへんだ！まに合わなくなっちゃう。きのう早くおこしてって言ったのにつ！」

私は、そうだっけ、と曖昧な返事をした。言われてみれば、昨日、そういうようなことを言っていた気がする。

「ごめん、ごめんよ。でも何で、今日は早く起きなきゃいけないかったんだい？」

私の質問は、どうやら絃一の耳には届いてないらしい。

すでに紘一は、子供特有の変わり身の早さで学校に行く支度をして
いた。

「たいへん、たいへん」

と言いながらも、どうやら焦りが作業効率を悪くしているらしく、
ちつとも急いで支度しているようには見えない。

「急いで準備しているとこ悪いんだけどさ、ご飯ぐらいは食べていき
なよ。それから歯もみがかなきゃね。大丈夫、ちつとぐらい遅れた
って怒られはしないさ。まあ、ちゃんと謝ればね」

紘一は、だめなんだよう、と今にも泣きそうな顔を見ると、一時作
業を中断した。

「ミクちゃんがね、今日はぜったい、早く行かなきゃ行けないんだ
つて。遅れたらぜっこうなんだつて。だから早くおきなきゃいけな
かったんだよう」

どうやら我が最愛の息子は、ミクちゃんなる女の子に尻をしかれて
しまっているらしい。そんな我が子の様子を想像すると、未来が見
えてくるようで、息子の狼狽ぶりとは対称的に笑いがこみ上げてき
た。

「ミクちゃんとは何時に約束してたんだい？」

紘一はもうすっかりしょげかえりながら、

「七時半」

と、小さな声で言った。

なるほど、普段だったら到底間に合わない。家から学校までは、子
供の足だと30分はかかる。我が家は校区の中でもかなりはずれた
位置にあった。

私は、むうと悩んでみると、画期的な解決方法を提案した。

「よし、じゃあ今日は父さんの車で行くか。この時間だったら先生にも見つからないだろうし。ただし今日だけ。今日だけ特別だぞ」

紘一はこれまた得意の変わり身で、にぱあっと笑うと、力強く、

「うんっ」

と頷いた。

「じゃあご飯も車ん中に持ってっちゃおう。けどパン、車の中にこぼさないでよ。日曜に掃除したばかりなんだからね。それからちやんと歯、みがくんだよ。その間に父さん、パン、チンしてるから」

紘一は、

「はい」

と言うと、さっさと下に降りていった。私はやれやれ、と一人つぶやきながら、紘一の後について階段を降りた。

私が八枚切りの食パンの二枚にバターを塗っていると、シャカシャカシャカという小気味のいい音が聞こえてきた。どうやら、私の言うことを守っているらしい。。でもどうやら完全に言いつけを守ったわけではないようだ。

私が一仕事終え、パンをトースターに入れている頃には、シャカシヤカの音は止んでいた。

トースターのタイマーをセットすると、私は洗面所へと向かった。

紘一は私の姿を見ると、これでどうだ、文句無いだろう、と言わんばかりに、ニカッと歯を見せた。前歯が一本欠けている。この前抜けたばかりなのだ。本人はそれが自慢でならないらしい。

「いら。ちゃんと百を二回って言うてるだろう。どう考えても三十一回ぐらいじゃなかったか」

紘一は、

「今日はトクベツだもん」

と、言っつてむくれた。

今日に関しては紘一の意味を尊重すべきだと思った。今の紘一の状態では何を言っつても無駄な気がするのもあるのだが。

「今日だけ、トクベツだからな。明日もこんな風だとミクちゃんにも振られちゃうな。口臭い人きらいって。もうそろそろパンも焼けるし、靴履いてなよ」

紘一は、

「くさくないもん」

と言いながら、私の脇をさつと通り抜けると、玄関の方へ向かっていった。

私はトースターの中をちらりと覗いてみる。トーストは、普段の物にしては少々焼けていない気がするけども、紘一のことをソソチヨウして、タイマーをグツとひねり、さつさと取り出した。

取り出したトーストを適当な皿にのつけると、左手に持ち、右手には車のキーを持ち、玄関へと向かった。すでに紘一は両方の靴ひもをすっかりちようちよ結びにし終えて、遅い、と言わんばかりに待ちかまえていた。ちようちよ結びも最近になって、一人でできるよっうになったのだ。

「早く、早く」

紘一が右手をひっぱる。車のキーがてのひらのあちこちに当たって

痛い。

「あ、家の鍵！」

私は慌ててはきかけの靴をほっぽりだし、家の中へと戻っていった。

私の背中には、

「もーっ」

という、紘一の恨めしげな声が伝わってきた。

夕飯時。ご飯を二人分よそうと、紘一と差し向かいに座った。

「いただきますっ」

二人しかない家に、一際明るい声が響き渡る。

私は、どんなに忙しい日でも紘一と一緒に夕飯を食べることにしていた。おかずはスーパールの惣菜ではあったのだが、二人の時間は必ず持った。それが親として当然のことだと思っていたからだ。

今日は回鍋肉と唐揚げだ。どちらもタイムセールで30%OFFのお買い得品である。少々栄養が偏っている気もするが、そのあたりはご愛嬌ということで許していただきたい。

最初は二人とも、黙々と食べ続けていた。これはいつものことである。親子のコミュニケーションよりもまず、自らの食欲を満たしておこうというわけだ。ある程度腹が落ち着いてくると、どちらかともなく口を開く。

「今日はミクちゃんと何をしたんだい？二人で早朝デートと洒落こんだのかな？」

紘一は、違つよ！と少年特有の照れを見せながら全力で否定した。

「今日はおいのりしてたのっ！」

「お祈り？」

紘一は顔を真っ赤にしながら頷いた。

「お祈りって何のお祈りなんだい？」

「あのねっ、ミクちゃんのお母さんがね、今日、しゅずつしたんだって」

紘一は、興奮しながら話した。そのせいで手術をちゃんと言えなかったようだ。

「ミクちゃんのお母さんはね、とおくにいるんだって。とおくのすごい先生がいるところにいるんだって。ミクちゃんもお母さんのところにきたかったんだけど、とおいからいけなかったんだって」

「だからお祈りしてたの？」

紘一はこくりと頷いた。今さっきとは打って変わって、しょんぼりしていた。

「ミクちゃんは、ぼくのお母さんがびょういんにいたとき、おいのりしてたのしってるんだ。だから、いつしょにおいのりしてって。こういちくんときは一人だったからダメだったけど、二人だったらだいじょうぶだった」

私は言葉を失った。紘一にとってはなんと残酷なお願いだろう。それも子供の純粹さによって許されたことに違いない。紘一はどんな思いで少女の願いに答えたのだろう。とにかく、紘一が苦しんだことに間違いはないだろうと思った。

私は、一旦箸を置かざるを得なかった。食欲は完全に失せてしまっ

た。まだ半分近くおかずは残っている。

「それで…ミクちゃんのお母さんはどうだったのかい？手術は上手くいったのかな？」

紘一は弱々しく首をふった。

「分かんない。ミクちゃん、学校終わると、車ですぐかえっちゃったから…」

紘一はそこで言葉を切ると俯いてしまった。自分の、悲しい記憶が甦ってしまったのだらう。

「でも、だいじょうぶだとおもう。お花もたくさんとったし、五回もおおいのりしたし」

紘一は顔を上げたが、言葉とは裏腹に声には力が無かった。私も、「そうだね」

と言いながら、もう一度箸を取ったが、今日の食事はそこでおしまいだった。

その後、二人で風呂に入ると、リビングで並んでテレビを見た。二人共通で大好きなバラエティー番組を見ていたが、お互いぽつぽつとしやべるだけで、九時を回ると各々自分の部屋へと向かった。

私はいつもと変わらず、ベッドで横になりながら文庫本を読んでいたが、ちっとも頭に入らなかった。だからといって、照明を消してもなかなか寝付けなかった。

何時を回っていたのだろうか、私はいつの間にか眠っていて、紘一が私のベッドに飛び込んできた衝撃で目が覚めた。

睡眠時間はいつもより短かったはずなのに、不思議とたるさはなかった。

夢は、見なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7786a/>

純情詩編

2010年10月13日17時12分発行